



五 半身を求めて（火星）

「生まれたよ」

男が右手を伸ばし、ベッドにぐったりと横たわった女の髪の毛を撫でる。

「男の子？女の子？」

先ほどまでいきっていた女がようやく息を整え、左目を開けた。

「男の子だよ」

男は右手だけで抱っこして、生まれたばかりの赤ちゃんを女に見せる。

「まあ、可愛い」

女の左の口の口角が上がった。

「あなたに似ているわ」

「いや。君だよ。男の子は母親に似るものなんだよ」

「そうかしら」

女の左目の目尻が嬉しそうに下がった。

「おめでとう。よく頑張ったね」

右半身しかない男の目の前には右半身しかない赤ちゃんが右目をつぶったまま、右半分しかない口をくちゆくちゆさせながら、すやすやと眠っていた。

その後、赤ちゃんは、父親の右からと母親の左からの両方の愛をそそがれ、すくすくと健やかに右半身として成長した。そんな息子を、右半身の父と左半身の母は、愛情あふれる右目と左目のまなざしで見守っていた。そんな家族にも別れの日がやってきた。

「父さん、母さん、これまで育ててくれてありがとう」

息子は、右手に持つ、松葉杖と右足で微妙なバランスを取りながら頭を下げた。

「もう行くのか」父が右半分の頬を上げた。

「もう行っちゃうの」母が左目から流れる涙を隠すように俯いた。

「どこかに僕の左半身の彼女が、僕が来るのを待っているんだ。お父さんとお母さんのように」

息子は右半身と左半身が抱き合った両親の顔をまっすぐに見つめる。

「ああ、わかっている。私もそうだった」

男が右手で女の左肩を抱きしめる。

「わかっているけれど・・・」と頷きながら、女は左の指で左の目頭を押さえ、男から体をそっと離す。

「行ってきます」

息子は右目だけで両親の半分の顔を力強く見つめる。

「行ってらっしゃい」

「・・・・・・・・・・」

男は息子の顔を凝視するものの、女は黙ったままだ。

「お前も知っているだろう。これが、我々、この星に住むものの定めなのだよ」

女は頭では理解しているものの、感情が納得しないのか、顔を伏せたままだ。息子を見送ることで、息子がいなくなることを認めてしまうのが怖かったのだ。

「ほら、見てごらん」

男は空に浮かぶ一つの星を指さす。その星は球形ではなく、ちょうどボールを半分に切ったような形で、いつでも一つになれるかのように、こちらの星に断面を向かい合わせていた。

女と息子が同時に顔を上げる。

「この星は双子星といって、火星の周囲を回る衛星だ。双子星は離れているけれど、お互いに重力で引き合って、まるで一つの星のように動いている。私たちはこの双子星の影響で、他の生物とは異なり、半分の体で生まれてくるけれど、それが返って、自分ではない、もう一人の自分を求めることになるのだよ」

男は離れた女の側に立った。半身同士が一つになった。その姿を見た息子は

「僕も、お父さんとお母さんのように、もうひとりの自分を見つけます」ときっぱりと宣言した。

息子は他の半身の仲間たちと同じように宇宙船に乗り込むと、双子星を離れ、太陽系からも旅立った。

それから、彼は宇宙のいくつかの星を訪れた。だが、理想の左半身は見つからなかった。そして、宇宙のオアシスと呼ばれる青い地球に到着した。

そこは、これまでの星と異なり、緑に覆われ、水に溢れた新世界だった。彼は喜んで、その新世界の各地を訪問した。どこに行っても楽しかった。だが、本来の目的である、理想の左半身を見つけることはできなかった。

ある日、ある街で、パブに行った。そこには、ギリギリスやサンタクロース、怪獣、人魚など、全宇宙からこの地球にやってきた宇宙人たちが集まっていた。みんな、お酒を飲み、人種を越え、互いに語り合っていた。

その陽気さにつられて、息子もカウンターでお酒を頼んだ。しばらくすると、パブが暗くなった。けだるい音楽が流れる。すると、フロアーで誰かが踊りだした。店のダンサーだった。それに見とれる彼や他のお客さんたち。だが、そのダンサーは妙に左側に重心が傾いていた。

まっすぐに踊れば、もっと魅力的なのに。彼は、杖を突きながら、そのダンサーに近づいていく。ダンサーと目が合う。彼の右目とダンサーの左目があった瞬間、彼はダンサーの腰に右手を当てる。ダンサーも左手を伸ばすと彼の腰に手を当てた。

「君に会いたかったんだ」

「あたしもよ。ダーリン」

「どれだけ宇宙を彷徨ったのか、知っている？」

息子が額に皺を寄せながら尋ねる。

「どれだけ長い時間踊っていたのか、知っている？」

ダンサーが目を細めながら微笑む。

右目と左目が見つめあう。

「君を好きになってもいい？」

「禁断の実を食べさせてくれるなら」

それから、二人は並んだままダンスを踊り始めた。まるで一人の人が踊っているかのようだった。ダンスは永久に続く。だが、全てに終わりがあるように、最後の曲がかかり、ラストダンスになった。そして、ダンスが終わった瞬間、彼は右半分の唇をダンサーに近づける。それに応えるかのように、ダンサーも左半分の唇を近づける。

「僕の左半身に乾杯！」

「私の右半身に乾杯！」

二人が唇を重ねたとき、魔法がかかったかのように、右半身と左半身は引っ付き、一つの体になった。

「僕のなかったはずの左半身の背中がかゆいんだけど。掻いてくれる？」

「もちろん、掻いてあげるわ。でも、これからは、そのジョークもジョークじゃなくなるわよ」

「君は僕だ」

「あなたはあたしよ」

息子はダンサーの左背中を右手で抱きしめる。ダンサーも彼の右背中を左手で抱きしめる。

「君を愛しているよ」

「あたしもあなたを愛しているわ」

双子星から離れたへき地で、二人は素晴らしい夜を、素晴らしい時を過ごした。そして、二人の間に、右半身の男の子と左半身の女の子が生まれた。やがて・・・。